

競作
五十円玉二十枚の謎

若竹七海
法月綸太郎
依井貴裕
有栖川有栖
笠原卓
阿部陽一
黒崎緑
いしいひさいち
佐々木淳
高尾源三郎
谷英樹
矢多真沙香
柳京助
高橋謙一



競作

五十円玉二十枚の謎

若竹七海

法月綸太郎

依井貴裕

有栖川有栖

笠原卓

阿部陽一



SOGEN SUIRI

競作五十円玉二十枚の謎

1993年1月20日 初版

1993年3月10日 再版

著 者 若竹七海ほか

発行人 平松一郎

発行所 株式会社東京創元社

東京都新宿区新小川町1-5 郵便番号162

電 話 東京 (03) 3268・8231 (代)

振 替 東京6-1565

印 刷 旭印刷

製 本 鈴木製本

乱丁・落丁本は小社までご送付ください。送料は小社負担にてお取替えます。

©Tokyo-Sogensha 1993

ISBN4-488-02404-1 C0093

目次

はじめに 戸川安宣 3

五十円玉二十枚の謎問題編 若竹七海 7

解答編 法月綸太郎 15

解答編 依井貴裕 56

一般公募作選考経過

若竹七海・法月綸太郎・依井貴裕・戸川安宣 72

《一般公募の部》

若竹賞 佐々木淳 87

法月賞 高尾源三郎 111

依井賞 谷英樹 131

優秀賞 矢多真沙香 149

優秀賞 榊京助 165

最優秀賞 高橋謙一 179

《プロ作家の部》

老紳士は何故……？ 有栖川有栖 200

五十円玉二十個を両替する男

または編集長Y・T氏の陰謀 笠原卓 244

五十円玉二十枚両替男の冒険 阿部陽一 268

消失騒動 黒崎緑 291

《プラス1ボーナス》

50円玉とわたし いしいひさいち 340

推理の饗宴 執筆者紹介を兼ねて 戸川安宣 342

はじめに

一昨年（平成三年）、小社刊のアンソロジー『鮎川哲也と十三の謎⁹¹』で、「鮎川哲也と五十円玉二十枚の謎」という小特集を組みました。若竹七海氏が十年前、実際に体験した謎に法月綸太郎、依井貴裕両氏が挑戦し、ふた通りの解答を寄せてくださったのです。じつはこの話は、その前年、若手の推理作家十数人が集って徹夜で四方山話に花を咲かせていたときに若竹さんから持ち出され、いつときみんなであだ、こうだ、と議論百出した話題でした。それだけ魅力的な謎だったわけですが、それならひとつそのテーマで競作してみよう、と提案したところ、『鮎川哲也と十三の謎⁹¹』の締切までに集まったのが、前記のとおり、法月綸太郎、依井貴裕両氏の作品だったのです。ただし、締切には間に合わなかったが、参加しなかったという人や、後からその話を聞いて自分もやってみようと申し出られた方など、思わぬ反響に、それなら一般公募してみようか、と考えたのがこの企画の始まりでした。

その結果、平成四年四月三十日の締切までに全部で三十六編の原稿が寄せられました。正直なところ、これはびっくりするような数字でした。本心を言えば、半ば冗談、面白半分の企画だったので、応募があってもせいぜい二、三編、いや一編もこないだろう、と高を括っていたのです。四十編に近い原稿の前に、世の中には、好きな人がいるんだなあ、と呆れたり、嬉しく思ったりしながら、これは本気で選考してはいけな、と気を引き締めた次第です。そして、六月十二日、大阪梅田の新阪急ホテル地下のヘモンスレーで、選考会を開き、最優秀作一編、優秀作二編、それに若竹、法月、依井三選考委員の個人賞各一編ずつの、計六編を選び出しました。

さらに、今回はプロ作家から四名の参加を得、合計十編の大特集となったのです。これはまさに予想外の事態であり、嬉しい誤算でした。同年から『創元推理』と名称を変えたオリジナル・アンソロジーは、予想をはるかに超過するページになってしまったのです。さて、どうしたものか、大いに頭を悩ませました。大変申し訳ないが、一般公募の分は最優秀作一編だけにさせてもらおうか、とも考えました。しかし、それにしても超過分は並大抵のものではありません。それより、せっかくの一般公募を、一編だけの掲載にするのはいかにももったいない。では、どうするか？　そこで、考えをコペルニクスの軌回しました。競作特集「五十円玉二十枚の謎」を単行本にしておもう、と。それが、本書というわけです。

今まで、こういったアンソロジーがなかったわけではありません。わが国でも、たしか、例の東京府中で起こった三億円強奪事件をテーマに、数人の推理作家が競作した短編集があったはず。しかし、いわばリドルストーリーのような謎に対し、その解答を一般公募し、プロ作家の解答と並べる——と、こういう趣向のアンソロジーは初めてではないでしょうか。

それなら、もう一度、若竹さんの問題編、法月・依井さんの解答編を再録し、今回の十編を加えよう、とここまで考えて、あと一編加えれば十三の解答になる、ということに気付きました。「五十円玉二十枚の謎と十三の解答」これでいこう！　ということで急遽御無理をお願いしたのが、いいひさいちさんで、朝日の朝刊連載をはじめ多忙を極める氏は、作中作ならぬマンガ中4コママンガをもって参加してくださったのです。

では、プロ・アマ作家競作による推理の饗宴を、心ゆくまでお楽しみください。

戸川 安宣

競作 五十円玉二十枚の謎

装画 豊泉朝子
装幀 小倉敏夫

五十円玉二十枚の謎 問題編

若竹七海

十年ほど前のことになる。私は大学に入学したてで、生まれて初めてアルバイトなるものに従事していた。

私の仕事は、大学のあった池袋いけぶくろのある大きな書店のレジ係であった。仕事は単調だが面白かった。私の主な受け持ち区域は一階のレジだった。一階は文芸書の単行本、少しの漫画、沢山の種類の雑誌を取り扱っていた。本屋のレジ係の仕事などというものは、まあ少し想像してもらえばわかるとおり、お客から代金を受け取り、これを包装し、礼の言葉とともに手渡す。そんなものである。みっともない制服を着て、何が面白くないのかむっつりとして本とコインを投げ出すお客にも愛想笑いを振りまき、ごく薄いペラペラの雑誌にまでカヴァーを付けろと要求する奴にも（そういう客にあたる時には必ずといっていいほど後ろに長い列が出来ていたりするのだ）ごく親切な応対をしなければならなかったが、働いたことのない私は、それでも結構その仕事を楽しんでた。いろんな種類の人が自分の目の前を通り過し、考えてもみないような本を買っていく。熱心に明治の文学者の本がないかと尋ねる人もいれば、図書券でアイドルタレントの水着写真集を買っていくやつもいる。嫌な思いをすることもある反面、面白い勉強もさせてもらった。第一、この程度でいちいち腹をたてていたら、どんな仕事も勤まるわけが

ない。それに、この仕事には大きな利点があった。新刊を二割引で買えるというたいへんな利点である。その当時、私は週四日から五日、夕方の五時から八時までの三時間を働いていた。記憶はあまりさだかではないが、土曜日はもう少し早い時間から働いていたように思う。一階の表のレジは、二重になった硝子の入り口の入って右側の壁ぎわにあった。レジスターは壁を背にして右側、カウンターに来るお客からみて横向きに置かれてあった。その壁には、本棚が作りつけられていて、主に漫画のハードカバーが並べられていた。このとき私は初めてつげ義春^{よしはる}という名前を知った。暇になると、奥のレジでは、カヴァーをサイズごとに折るといふ作業をすることができたが、表通りに面しているこちらのレジでは、そういった作業をすることもできず、ただただ通りを行く人達を眺めたり、本の背を見つめ暮すしかすることがなかったのである。

ある土曜日の夕方である。一人の男がたいへんに急いで店にはいつてきた。彼は、他の人のように、書棚に向かわず、まっすぐレジにやって来て、手に握りしめてきたらしい硬貨をずらりと私の前に並べて、

「千円札と両替してください」

というような意味のことを言った。

他の書店は知らないが、こういう点、私の勤めていた書店は親切であった。両替の御客様にもちゃんと応対するように言われていた。私は硬貨を手にとった。気味悪く温まったそれは、五十円玉で、二十枚ちょうどあった。私がそれを数えている間、彼はなんとなくいらした様子で待っていて、千円札を渡すとはとんどひったくるようにそれを受け取り、身体を自動ドアにぶつけながら礼も言わずに通りに消えた。

それから男は、たびたび、しかも土曜のたびにレジにやってきて、五十円玉二十枚を千円札と両替す

るように言った。両替が終わると、さっさと姿を消した。ゆっくり数えながら横目で男を見ると明らかに苛立っているのがわかった。

この「事件」は私を大いに刺激した。男は、中年で、ばつとしない顔付き身体付き、身なりをしていた。偏見のもとに一口で言えば、あまり本屋には縁がなさそうなタイプだ。事実、彼は一度も本を買ったりしなかった。その男がなぜ、どうして土曜の夕方ごとに、五十円玉を千円札と両替してもらいに来るのか。

両替なら銀行に行けばいい。当時はまだ金融機関も土曜日にちゃんと営業していた。しかし、土曜であらうとなかろうと、夕方には窓口は閉まっている。だから、両替をしてくれるこの本屋を両替商の窓口として利用しているのだろうか。

まあ、それは考えられなくもない。しかし、もっと大きな問題がある。この男は、他の硬貨ではなく、なぜ五十円玉を持つてくるのだろうか。百円玉や十円玉を集めるのはたやすい。釣り銭で、多ければ百円玉も十円玉も四枚返ってくることもある。しかし五十円玉、五円玉は二枚以上返ってはこない。意識して五十円玉を集めているならいざ知らず、普通の人なら、知らず知らずの内に、一週間で五十円玉が二十枚集まるということはあまりありえない。たまにそういう週があったとしても、毎週続けてというのは無理である。それに、意識して集めているのなら、両替する理由がない。そういう中途半端なやり方で両替するのは妙であろう。

では、この男は何らかの理由で五十円玉が集まりやすい商売をしているのだろうか。例えば、五十円のもの売っているとか。

しかし、これにも無理がある。もし五十円の商品を売っているとすれば、釣り銭として五十円玉が必要なはずである。千円札を五十円玉に両替してくれるように頼むならともかく、五十円玉を千円札に両

替する必然性がない。では六十円か七十円のを売っているのか。それなら確かにつじつまはあう。釣りとして必要なのは十円玉で五十円玉ではない。しかし商売をしているのなら、それこそ両替の舞台は銀行である。銀行はそのためにあるのだ。

大きくまとめると、この男の行動には、つまるところ二つの主要な疑問点があるのだ。

- ① なぜ本屋で毎週五十円玉を千円札に両替をするのか
- ② その五十円玉はどうして毎週彼の手元にたまるのか

私はさまざまな可能性を、脳味噌を振り絞って考えた。もっと多くのデータをとりうと思い、同じ一階のフロア主任にその男について尋ねたことがある。主任は彼に興味がないようだった。そのうえ「御客様」についてあれこれ詮索するのは客商売の名にもとると考えていた。まことにあっぱれかつ立派な態度で、この件の他のデータをそれ以上とれなくなった。それに、夏が終わるころ、私は体調を崩したせいもあって、そのバイトをやめたのである。

しかし謎は残った。私は大学の先輩たちにこの「謎」について話した。そのうちの一人はその手の謎話が大好きな先輩である。彼女もあれこれとこの謎について考えていたようではあるが、結局衆人を納得させる解答を見つけ出すには至らなかった。しかし、彼女はこの硬貨両替事件を元にして、ある短編を作り出した。この先輩の名が澤木喬さわき きょうであるということを聞けば、彼女の著書を読まれた方は、ああ、と思い当るであろう。解かれなかったとはいえ、謎は一つの種子となつて、違った色の実を結んだのである。

十年あまりの歳月が流れた。一九九〇年の秋、秋というにはまだあまりに暖かい十一月に、東京創元

社では、第一回『鮎川哲也賞』の発表披露パーティーを催した。その翌日、日本ミステリ界の若手作家ばかりを集めたシンポジウムが開かれ、その両日ともに私は出席の光栄を得た。シンポジウムの終わった夜、私を含めた幾人かの運の悪い人間が、北村薫先生きたむらかおの言葉を借りるなら「このシリーズをお読みの方には連続ドラマの登場人物のようにおなじみの」戸川編集長に捕まり、『新・地獄荘』に連れ込まれた。一行は戸川編集長の厳しい監視のもと、ミステリ談議をすることを強要され、かのシェーラザードのように、脳味噌からすっかりしわがなくなるまで話し続けなければならない運命に陥った（余談だが、有栖川有栖先生ありすがわの傑作『マジックミラー』は、その前の年の『地獄荘』でのこの厳しい試練の中から生まれたものだといっている）。

話題はたまたま本屋の話になった。有栖川先生が本屋にお勤めということで、万引の新種の話、それに対抗する防衛策についてなど、話は続いた。私は、十年來の謎を解いてもらうのは今だ、と思った。このとき、『新・地獄荘』には、法月綸太郎のりつきりんとろう、我孫子武丸あびこたけまる、有栖川有栖御夫妻、北村薫、依井貴裕よりいたかひろ、澤木喬と、日本ミステリ界の誇る若手の先生方がずらりと顔を並べられていたのである。このチャンスに逃す手はない。

幸いなことに、両替事件は先生方の興味を引いた。私が十年間考えてもみなかった意見が出された。例えば、その男はなんらかの理由でレジの中の千円札が欲しかったのだ、という説。五十円玉はゲームセンターで集めてきたのではないか、という説。レジの女の子（私だ、私！）の顔見たさにそういう突飛な行動をとっていたのだという説。他にも、五十円玉の内側の穴になにかの細菌を塗りつけてそれを世間にばらまくために本屋を利用している説（！）など様々な意見が出された。

しかし、どれも決め手ではないのはいうまでもない。レジの千円札が欲しければ、五千円札なり一万円札を両替すればいいではないか。その方が自然だ。もし彼が貧乏で五千円札や一万円札を持っていな

かったとしても、だったら百円玉をもってくるのが普通というものだろう。ゲームセンター説は、五十円玉を自然に大量に使う場所の設定として目からうろこが落ちるような指摘だったが、大量に使うということは、ゲーセン内で五十円玉が回転しているということ、わざわざ本屋に持ってくる必要はないと思う。また、レジの女の子の顔が見たいのなら、なにもいらいと数えるのを待って慌てて飛び出していくことはない。じっくり眺めりゃいいんだ。その男が飛び抜けてシャイだったのかもしれないが、本屋などというものは、別段なにも買わなくても、もちろん両替などしなくても、いつまでもうろうろ出来る場所である。

いろいろの意見がやたらとでたが、結局、全員がなるほどと膝を叩くような意見は残念ながら出てこなかった。ディスカッションは黒後家蜘蛛の会の様相を呈し始め、しまいにはみな口々にこの家には給仕はいないんですかなどと言いつつ始末だった。私はがっかりするとともに、ほんのちょっとだけほっとした。十年間考えてわからなかった謎が、一時間やそこらで解かれてはたまらない。これは、次回の『鮎川哲也と十三の謎』では『鮎川哲也と五十円玉二十枚の謎』というタイトルで競作でもしなくちゃいけませんかねえ、などと有栖川先生が冗談をおっしゃって、その謎解きについてはとりあえずうやむやのうちに、終わった。

『新・地獄荘の夜⁹⁰』は例年になく一人の死人も出さぬままお開きとなり、秋もあいかわらず暖かいながら少しづつ更けていったある夜、私は戸川編集長から電話をいただいた。用件が済むと、「ところで」と、編集長は妙に嬉しそうに言いました。

「あの、例の『五十円玉二十枚の謎』ですけどね、あれを競作という形で『鮎川哲也と十三の謎⁹¹』に掲載したいと考えているんですよ」

「はあ？」

私は問い返した。

「あれ、冗談じゃなかったんですか？」

「へへへへ、いや、あのときあそこにいらした先生方にはもう原稿の依頼をしました」

「そ、それで、どなたかお書きになるんですか」

私はびっくりして尋ねた。

「何人か、書いていただけるそうです。現実そのままというわけにはいきませんから、人物と場所は自由ということでお願いしました。五十円玉二十枚を千円札に両替する人物が、あるところに現われる。

この行為だけは統一して、あとは自由に発想していただきます。老婆なり子供なりが、八百屋なりあんみつ屋に現われる。さて、その理由やいかに。については若竹さんに、問題編をお願いすることです……」

「はあ……」

「なんなら、解答編も書いてくださっても」

「あ、いえ、それは結構です」

私は慌てて答えた。一か月後にいただいた『鮎川哲也と十三の謎'90』には、'91の予告編があり、「若手作家が五十円玉両替事件の謎に迫る！〈出題〉若竹七海」としっかり印刷されてあった。

これが、「五十円玉二十枚の謎」なる競作が催されることになったいきさつの全てである。

編集長はあんなこと言ってたけど原稿が集まるのだからかね、などと諸先生方の能力を過小評価していた私におかまいなく、いくつかの短編がめでたく提出され、冗談からでたまこと、競作は成立した。

読者の皆様は、五十円玉を二十枚両替するという行為から、それぞれの作家がひねり出した解答を堪能

されるだろう。だが、本来の意味での解決はまだである。私はこの謎を墓場までたった一人で抱えていくのはいやだ。どなたか、私の遭遇した謎を解いてみてはいただけないだろうか。さもなくば、私だけではなく、この問題編を読んだあなたも、墓の下で「あの男はどうして五十円玉を……」とうめき続けることになるかもしれないのである。

なにか、ご質問はございますか？（ありませんように）